

加藤有佳織

松浦幸恵「渡船場で」（「樹林」Vol.680）はよく整えられた短篇でした。夕方の渡船場、最終便を待つ人々のなか、静かに居座る老人がいます。その姿に語り手は、「人の気配が恋しくて」カプセルホテルに通った高校生の自分を思い出します。中学生のときに祖父母が、2年ほどして母が亡くなりました。その死を静かに受け入れたように語り手はふるまっていたですが、部活や受験の忙しさが消えたとき「自分がどれほど途方にくれているか気がつきました。仕事に邁進する父との距離は広がり、家は寂しい「暗闇」で満たされ、彼は「人の気配」にあふれたカプセルホテルでようやく眠ることができたのです。語り手はずっと孤独を抱え、昨年末に父を刺して逃げ、この渡船場に流れ着きました。最終便を見送り、係員も老人も去った待合室で悪夢にうなされながら夜を明かします。人々が通り過ぎて行く渡船場で身動きの取れない者の心のうちを表す刈り込まれた語り手に惹かれるとともに、「気配」だけではない人の存在が控えめに示されることにほっとします。

都賀久武「鬼無しの話」（「茶話歴談」第四号）の語り手は、5歳のときに父と里を去り都で下人となりました。主

の「ごい様」が催す宴は「雅」なものと教えられますが、彼には不可解でした。それから5年、下人の子ニレとひそかに外出した際、出くわした賊から語り手をかばったニレが顔に傷を負います。ニレは売られ、語り手が主の供などを務めるようになります。夏、蛍見の宴で使われた蛍を主の子須弥に乞われて逃すために夜の河原へ行くと、十余名の賊が酒を飲んでいました。尋ねられるまま屋敷について話すと、賊たちは動き始めます。従五位の主を襲いに行くのです。彼らの放った火が屋敷を焼くなか、「雅なもの燃えない」と思っていた「語り手は「何だ燃えるのか」と「驚き、失望」します。与えられた刀を振るって須弥を殺した語り手は、賊に加わり……。かばわれながらも「謝るしかない」のは「弱いから」だと考え、賊に加わり「強い」ことを求める直截で即物的な言葉に力がありました。

高田友季子「後を追う」（「菓」）が描き出すのは、息子圭太から婚約者の真理を紹介されて心が軋む恭子です。信一との結婚を機に仕事を辞めてからはパートで働き、4年前から義母米子の介護をしています。デイサービスも利用しますが、気難しい義母の介護は容易くはありません。そうした日々のなか、圭太と真理が訪ねて来るたびに、恭子は「この手からこぼれていった未来の中で、真理が悠々と泳いでいる」と感じます。信一の誕生日を祝いたいという申し出に応え、気持ちを抑えながら真理と料理する恭子のなかに、かつて米子から向けられた言葉や態度がよみがえ

佐々木義登

西村郁子「タンスの中のわたし」（「せる」第119号）の主人公由那は若くして皮膚がんを患い手術をしました。退院後、人生をリセットし彼女は新たな一歩を踏み出します。マッチングアプリで知り合った男性に誘われ、SM愛好グループの集まりに参加、最初は受け身でしたが、次第に緊縛プレイの虜になっていきます。やがてプレイをカメラ撮影するという要素も加わり一層のめり込みます。台湾旅行中に知り合った同じ趣味を持つチョウライの緊縛プレイの写真を世に出すことで、彼女はSM写真家として認知され個展を開くほどになります。やがて緊縛と木花とを合わせセルフポートレートで撮影するという新たな取り組みを始めるのでした。本作はひとりの女性が深刻な病をきっかけに既存の自由という概念を問い直し、世間体や社会性を文字通り脱ぎ捨て、体を縛ること、そしてその姿を撮影し表現することで「自由」を獲得する物語となっています。SMプレイが主人公にとって求道の域にまで達してゆく様子に引き込まれました。

岡原郁子「物語の終わりに」（「樹林」Vol.680）は、浮気相手を妊娠させた夫と離婚した日に、主人公「私」が、自分のことをよく知る謎の女と出会うことをきっかけに紡がれる不思議な物語です。離婚、退職、恋人との別れ、人生の節目で、同じ謎の女が現れ、まるで全てを知っているかのように言葉をかけていきます。作品の最終部、主人公に子宮が見つかり、手術を間近に控え、よりが戻った恋人との最後の逢瀬に向かう途中、またくだんの女が現れ「娘が夫の浮気相手の女が許せないと刃物をもって家を出た」と告げます。去ってゆく女を追う主人公は、恋人の妻に道端で刺されます。そこで初めて、知らない女が実は自分自身であったことに気づくのでした。恋人が自身の娘であったこと、自分が実の娘に刺されたことも、そこに至って初めて明らかになるという仕掛けでした。これまでも繰り返し題材になってきたドッペルゲンガーですが、離人感と融合することで一層得体の知れなさが醸し出されています。

なかむらあゆみ「菓」（「菓」）は架空の小さな島に暮らす人々の暮らしが十三年にわたって描かれます。島の住宅は高齢者や障害のある人でも安心して暮らせるよう作られた市営住宅ですが、周囲からは差別を受け、隔離されたように人々が暮らしています。主人公ハナを取り巻く登場人物たちは全員が女性で、ステテコを普段着にするなど自由で個性的、ただ心に何らかのわだかまりを抱え、それを補い合い、支え合いながら生きています。しかし外部の心ない人々から、島の暮らしが脅かされる不穏な気配を醸しな

ります。一見和やかである台所や食卓の情景に、粗い手ざわりの不安や圧迫感を生み出す筆致が秀逸でした。

香名山はな「サイドライン」(「逍遙通信」第六号)は、2021年の晴れたある日、綾が天窓のある部屋を契約する場面から始まります。彼女は内職斡旋の会社で働いています。トラブルもある職場ですが、如才ない翼という青年が加わり、業務進行も雰囲気も改善します。語りはここで1999年へ遡ります。20歳の綾は会社を辞め、「夢や目標を求めている人たち」が集まる沖繩のゲストハウスに滞在しています。「何かを求めて旅に出」た綾ですが、彼らは「私のように、はみ出した者」ではないと考えます。そのなかで気が合ったのが、元カメラマンのヤマさんでした。1999年と2021年とを往来する語りのなかで「はみ出した者」だという綾の自意識がそろりそろりと剝がれていく味わい深い作品でした。

吉永ケイト「黒い家の赤い花」(「P」37号)の語り手は、愛知県奥三河の小さな町に暮らしていました。昭和40年夏、ビリヤード場に父を迎えに行った帰り、葛屋という駄菓子屋に寄ります。店主は「町長の妾」と噂され、父と彼女のやりとりで語り手の心はざわつきます。煙たいビリヤード場、葛屋で見た赤い花、狸、渋黒塗の板塀。それらは記憶に鮮烈に息づいています。50年を経て再訪すると、また別のもののようにも見えるのです。

南水梨絵「金柑の木の庭」(「せる」第119号)の語り手は、世界が「誰にも気づかれないままわずかにちがってしまったのではないだろうか」という疑いを抱きます。恋人との何気ないやりとりや勤務する高校での小さな出来事がこの疑いを強めますが、「違和」の正体を探り、「心」の連続性を確かめようとする語り口に引き込まれます。

秋乃みか「庵」(「じゅん文学」第108号)は、切田川域に生きたる伊都を描きます。夫が行方不明となり、水難事故と考えられる一方で、駆落ちとも噂されました。娘とともに喪失感と疑念に苦しんだ日々を振り返る70歳の伊都の静かいて濁流のような感情を体現する作品でした。

篠原紀「いづれ嫌いになる」(「創作」IV)と「空を飛ぶための生活法」(「創作」V)はともに筆力を感じさせる作品で、どちらも視点の切り替えがスリリングでした。

高梁遼夢「絹女の堤」(「文芸エム」第6号)では、妻や養女の絹とともにデウスを信仰する本郷助左衛門が治水工事の統括を命じられ、悲しく気高い犠牲が払われることになり。ほかに、薩摩藩政下で弾圧されながらも一向宗を信じる農民たちを描く園田明男「かくれがま」(九州文学「通巻78号」、北海道の茶間屋に奉公しながら遠夜夜学校に通う誠二郎の努力を綴る中山真佐子「北極星」(「苦小牧文学」26号)が滋味ある作品でした。部屋のシェアを持ちかけられた顛末を語る柳宗一郎「シェアしませんか?」(「木綿葉」第16号)も印象的でした。

がら作品は閉じられます。男性中心社会の規範や論理に頼ることなく、運命を受け入れて自然に暮らす女性たちの姿が生き生きと描かれています。ややペシミスティックなラストも安易な感動物語になることを回避していて好感が持てました。また人間社会を揶揄するかのようウサギの姿が象徴的でした。

吉永ケイト「黒い家の赤い花」(「P」37号)は還暦を迎えた主人公が幼い日の一場面を回想する物語です。昭和四十年、愛知県の山間の町、大人たちの入り組んだ人間関係が子供の視線から語られます。母に頼まれ、ビリヤード場へ父を迎えに行く主人公、父と連れだつて帰る途中に黒い家の駄菓子屋に寄り、そこで町長の妾と言われている艶めかしい女性とやりとりする場面は面白く読みました。また弘法山に登って頂上から町を見下ろしながら「ちっげけな町だな」という父の感傷に満ちた言葉が印象的でした。一見年配者の思いつき話のように見えますが、主人公が人生を振り返る年齢に達してから十歳の自分を包括した形で語ることで、母と父の微妙な距離感、男たちがたむろするビリヤード場の臨場感、黒い家の艶めかしい女性の描写がリアルに立ち上がっていました。子供の目を通して書きつつ、折々に成熟した大人の視点が介入する描き方が、物語に奥行きを作り出していると感じました。

能美亨「霧の社へ」(「樹宴」第22号)もかつての生まれ故郷へ主人公が立ち帰る物語です。ただ「黒い家の赤い花」とは趣を異にし、現れる光景は統一性に欠け、人間の描写も明確ではありません。田舎特有の閉塞感とそこから醸し出される不確かさ、最後は表題のごとく全てが霧に包まれるように読むものを幻惑してきます。本作においてはそのような筆致が成功していました。

北川珪子「夜明けの人」(「AMAZON」510号)は主人公礼子が早朝、ラジオ体操に行くため家を出る場面から物語が始まります。途中で家が分からなくなつて佇む老婆と出くわします。いとうさんというその老婆を助けるうち、この世にすでにいない母親が不意に現れ、救いの手を差し伸べてくれます。いとうさんの存在を通して亡き母の優しさに触れることの出来た主人公は、ついにいとうさんを探していた息子と出会えて、作品は閉じられます。老いや病、死といった私たちにとって避けがたい深刻な問題とどんな心持ちで向き合えばいいのか、その点が真摯に直截な筆で描かれました。

それ以外では柳沢さうび「反転銀河に擬似星座」、魚家明子「COLORS」(「ずれも」北方文学「第84号」、山上この葉「みすていく」(「文芸エム」第6号)、加藤京子「麩園にアリア誓いて」(「カプリチオ」第52号)、篠原紀「空を飛ぶための生活法」(「創作」V)、南水梨絵「金柑の木の庭」(「せる」第119号)を興味深く読みました。